

高等学校現代社会における“言葉”の問題に関する事例的研究

○大野 健太(上越教育大学)

西川 純(上越教育大学)

(j275609k@myjuen.jp)

要約

本研究の目的は、『学び合い』授業を通して、高等学校現代社会において、学習者が学習を進めていく過程で、どのような言葉に躓き、またその言葉の躓きをどのような方法を用いて解決していくかを明らかにする。その結果、高等学校現代社会での『学び合い』授業の結果、学習者は教科に関係する用語だけでなく、教科に関係のない用語での躓きも多くみられた。そしてそれらの言葉の躓きは教科書や辞書を用いて解決するだけでなく、周囲の人と関わることを通して解決していることが本研究を通して明らかとなった。

キーワード：『学び合い』、発話分析、現代社会、用語

I 問題の所在

これからの時代に学ぶ子供たちは、明治以来の近代教育が支えてきた社会とは異なる社会で生活し、仕事をしていくこととなる。今後どのような社会となっていくか予測できない時代だからこそ、多様な人々と協力しながら主体性をもって人生を切り開いていく力、混とんとした状況の中に問題を発見し、答えを生み出し、新たな価値を創造していくための資質や能力が重要となる¹⁾。

高大接続システム改革会議の中で、このような時代に向けた教育改革は、「学力の三要素」を一人一人の学習者が身につけ、予見の困難な時代に、多様な人々と学び、働きながら、主体的に人生を切り開いていく力を育てるものにならなければならないと述べている²⁾。

学力の三要素について中央教育審議会(2014)は、社会で自立して活動していくために必要な力という観点から捉え直し、高等学校教育を通じて(i)これからの社会で生きていくために必要な、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度(主体性・多様性・協働性)」を養うこと、(ii)その基盤となる「知識・技能を活用して、自ら課題を発見しその解決に向けて探究し、成果を表現するために必要な思考力・判断力・表現力」を育むこと、(iii)さらにその基礎となる「知識・技能」を習得させることと述べている³⁾。

高等学校現代社会において、国立教育政策研究所(2005)が行った教育課程実施状況調査⁴⁾によ

ると、「現代社会の授業がどの程度分かりますか」という質問に対し、分からないことが半分以上あると答えた生徒が65.4%おり、授業改善は喫緊の課題といえる。

現在、高等学校教育の授業改善への取り組みも見られるが、高大接続システム改革会議のなかで「学力の三要素」を踏まえた指導が十分に浸透していないことが課題として指摘されている⁵⁾。そのような状況において具体的な授業改善として、いわゆるアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善を行うことが必要となる⁶⁾。

この課題を解決する可能性の一つとして、西川(2013)の提唱する『学び合い』がある⁷⁾。『学び合い』とは、「一人も見捨てない」という願いのもと、子ども同士で教え合い、学び合い、自発的に学習していく授業である。

平林ら(2009)は、小学校社会科の授業に『学び合い』を導入し研究を行った⁸⁾。

その結果、学習者は、重要語句や難解な語句とされる社会科用語だけでなく、それ以外の言葉にも多く躓き、その躓きを相互に関わり合うことによって解決していることを明らかにした。また、学習者が言葉の問題に直面したことを呟き等の言語活動によって周囲に可視化し、周囲の反応を状況的に判断して即座に解決法を選択して問題を解決していることを明らかにした。そして『学び合い』の継続が社会科の学習内容の理解を促し、学力の向上へつながることを明らかとした。

また岡田ら（2014）は、高等学校地理 B で『学び合い』授業の実施調査を行い、学習者は地理用語だけでなくそれ以外の用語にも多く躓くことを明らかにし、その躓きは周囲と関わりながら解決方法を主体的に選択し、ほとんどの躓きを解決していることを明らかにした。岡田らは『学び合い』は高等学校地理歴史科、地理 B の言葉の問題に対して解決の一助であると述べている⁹⁾。

そこで本研究の目的は、高等学校現代社会において、岡田ら（2014）に準拠し、授業中の会話から生徒の“言葉”の躓きを分析し、その躓きの解決がどのように図られているかを明らかにし、『学び合い』の有効性を考察する。

II 研究の目的

本研究では、調査期間中一度も欠席していない生徒 4 名を無作為に抽出し、総発話時間のうち、言葉に関する発話時間を明らかにする。また、これらの言葉の種類の分類を行い、これらの結果をもとに、躓いている言葉をどのように解決しているのかを明らかにしその解決状況も明らかにすることで、『学び合い』が生徒の躓きを解決する一助であることを明らかにする。

III 研究の方法

1 調査期間

平成 28 年 11 月 15 日（市民生活と法）

平成 28 年 11 月 18 日（法の支配と人権）

2 調査対象

A 県立 B 高等学校 1 年、現代社会のクラス（20 名）。

3 調査方法

・教室全体を撮影するため教室対角線上にビデオカメラを 2 台設置する。

・学習者全員にボイスレコーダーを身につけさせ、授業中の会話を記録する。

4 分析方法

（分析 1）学習者の学習活動時間における発話を、岡田ら（2014）¹⁰⁾に準拠して「言葉に関する発話」と「その他の発話」にカテゴリで分析を行う。

（分析 2）分析 1 のカテゴリ分析で抽出した「言葉に関する発話」を岡田ら（2014）¹¹⁾に準拠し

「現代社会用語」と「現代社会用語以外」とに分類し、学習者がどのような言葉に躓いているか明らかにする。

（分析 3）分析 2 で抽出した言葉の理解について、意味が分かり、学習を進めることができている事例の割合を取り出す。

（分析 4）分析 3 で言葉の意味を理解し学習を進められた発話事例から、言葉の躓きについてどのような解決策を講じているか、岡田ら（2014）¹²⁾に準拠し「他の学習者」・「教科書等」・「授業者」にカテゴリ分類を行う。

IV 結果と考察

学習者は言葉の躓きに対し、周囲の人との関わりなどを通して、躓きを解決していることが明らかとなった。

※詳細は当日発表する。

V 引用・参考文献

- 1) 高大接続システム改革会議：「最終報告」，2016.
- 2) 前掲書 1)。
- 3) 中央教育審議会：「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に開花させるために～（答申）」，2014.
- 4) 国立教育政策研究所：「質問紙調査結果集」，p473. 2005.
- 5) 前掲書 1)
- 6) 前掲書 1)。
- 7) 西川純：「学校が元気になる『学び合い』ジャンプアップ」，p. 17. 学陽書房，2013.
- 8) 平林邦章，西川純，岩崎太樹，水落芳明：「小学校社会科における“言葉の問題”に関する研究」，臨床教科教育学会，第 9 巻（2），pp. 9-18，2009.
- 9) 岡田哲典，関谷明典，西川純：「高等学校地理での“言葉”の問題に関する事例的研究」，臨床教科教育学会，第 14 巻（1），2014.
- 10) 前掲書 9)。
- 11) 前掲書 9)。
- 12) 前掲書 9)。